

副鼻腔炎

副鼻腔炎とは？

副鼻腔とは、鼻の周囲にある骨の空洞部のことで、額に位置する「前頭洞」、両目の間に位置する「篩骨洞」、頬の上に位置する「上顎洞」、鼻の奥に位置する「蝶形骨洞」の4種類があり、それぞれ細い通路で鼻腔につながっています。

副鼻腔炎はこの部分の炎症に伴う症状をいい、急性期と慢性期に分けられます。

急性副鼻腔炎

風邪などの感染症や鼻炎による炎症が副鼻腔に及んで生じます。症状は膿性鼻汁、鼻づまり、頭痛、頭重感、副鼻腔部の鈍痛などで、粘膜から排出された膿が、炎症による粘膜の働きの悪化や粘膜

肥厚による鼻腔排出口の閉鎖によって、副鼻腔内に溜まることで起こります。通常は、原因となった感染症の治療とともに内服薬が用いられ、1ヵ月ほどで治癒するといわれていますが、自然に膿が排出して治癒することもあります。この他、点鼻薬やネブライザー（噴霧器）による投薬、加湿器による水蒸気の吸引などが行われます。

慢性副鼻腔炎

蓄膿症とも呼ばれています。急性症状が長びくことで、貯留する膿により、粘膜の炎症が慢性化したものや再発を繰り返すものをいいます。慢性化には、アレルギー性疾患による副鼻腔粘膜のアレルギー変化や虫歯・歯周病菌などの口腔細菌、飛行機や潜水による気圧調節不全、

鼻中隔彎曲症など鼻腔閉塞を起こしやすい体質などの複雑な要因が関連しています。急性時の症状のほか、においが分からなくなる嗅覚障害、鼻汁がノドに落ち込むこと（後鼻漏）による咽喉部や気管支の炎症、炎症が耳に波及したことによる中耳炎に至るケースや集中力や記憶力の低下の原因ともなり、日常生活に支障を来すことがあります。

急性期のような薬剤による治療も行われますが、効果が得られない場合や肥厚した粘膜の一部が塊となって鼻腔中に突出する鼻茸（ポリープ）が見られる場合には手術の適応となることがあります。

副鼻腔炎の予防には、原因となる感染症に罹らないよう、抵抗力をつけることが重要となります。

今日の漢方処方…………… 小青竜湯《傷寒論・金匱要略》

鎮咳去痰，抗アレルギー，利尿作用を有する生薬と、それらの働きを助けて調子を整え、機能を高める生薬が配合された処方です。循環障害による水分排泄障害やアレルギー体質が基本にあるものの、水様性鼻汁や痰，くしゃみを伴う呼吸器疾患やアレルギー性疾患に用いられます。麻黄が主薬であるので、やせて顔色が悪く胃腸の弱い人には適さないようです。

小青竜湯の構成生薬

マ	オウ	ゴ	ミ	シ
麻	黄	五	味	子
ケ	ヒ	カン	キョウ	
桂	皮	乾	姜	
カン	ソウ	サイ	シ	
甘	草	細	辛	
ジャク	ヤク	ハン	ゲ	
芍	薬	半	夏	

五味子

五味子は《神農本草経》の上品に収載される生薬で、マツサ科チョウセンゴミシの成熟果実を乾燥したものです。

「乾いた果実をなめると塩からく、果肉を食べると酸っぱい味があって甘く、種子を噛み砕くと苦くて辛い味がする。」と著されるように、塩からさ、酸っぱさ、甘さ、苦



さ、辛さの5種類の味を備えていることから名付けられました。もともと日本の山地にも自生する植物ですが、朝鮮から渡来した帰化植物のような和名がついています。これは、江戸時代の「享保年間に朝鮮より種子が渡来した。」と書物に記載さ

れ、実際多く輸入されていたことに由来します。そのため、明治時代に自生が確認された後も、単にゴミシとはせず慣習的に“チョウセン”をつけて用いました。

五味子は、schizandrin や gomisin A を主な有効成分とし、鎮痛，鎮咳，鎮痙，抗潰瘍，抗アレルギー作用などを示

します。小青竜湯や清肺湯などに配合されるのはそのためです。また、滋養強壯の効果も有し、人參養榮湯や清暑益氣湯などに配合される他、強い肝保護作用があることも判っています。味だけでなく、その作用も多様な生薬なのです。